

## 第11章

# 国立女性教育会館40周年記念事業

細川 芽・山崎 裕子

### 1 はじめに

国立女性教育会館（以下、NVEC）は、国立としては唯一の、成人女性のための社会教育施設として1977年に設立された（当時の名称は国立婦人教育会館）。平成29年度は開館40周年の記念の年ということで「40周年記念対応班」「40周年記念展示班」という課室横断的な2つのプロジェクトチームを結成し、40周年事業を実施した。

本稿では40周年記念事業として行った事業について紹介する。

### 2 国立女性教育会館開館40周年展

女性アーカイブセンター展示室（以下、展示室）では、アーカイブセンターの所蔵資料を展示する「所蔵展示」と、複数の他機関から資料を借用して展示する「企画展示」を、ほぼ半年ごとに交替で実施しているが、平成29年はNVEC開館40周年の節目に合わせ、「特別展示」と銘打ち「国立女性教育会館 開館40周年展」（以下、40周年展）を実施した（2月17日～12月17日）。

#### 関連資料の収集

展示の実施にあたっては何の資料を展示するかが重要である。40周年展

の場合、NWECの前身にあたる国立婦人教育会館の設立時以来40年分の関連資料が主要な展示対象となるが、今までNWECでは、公文書など一部の書類を除き、そうした資料を系統立てて収集・保存するというを特にしてこなかった。そのため、展示の準備はNWEC内に眠る過去の資料を発掘することから始まった。

展示担当者がNWECに着任したのは平成26年のことで、古い資料の所在について把握していなかった。そこで、各部署の職員に尋ね、本館・研修棟・宿泊棟の倉庫等から資料を集めて回った。平成22年にNWECで建物の耐震工事が行われた際、複数の部屋の整理が行われ、場所を塞ぐ大きな展示パネルや古い文書などがやむを得ず処分されていたことは残念だったが、数十年分の写真アルバム、国立婦人教育会館の紹介ビデオ、事業紹介のパンフレット類、要人来館視察の際に作成した手書きの打ち合わせ書類などが保管されていることがわかった。その中から、視覚的に少しでも目を引くような、展示に適すると思われる資料を選び、展示ケースに収めた(図1)。

膨大な写真の多くが、開館以来一貫してNWECの主力事業となっている各種研修の風景を撮影したものだったが、会場に大勢の参加者が座っている後ろ姿を遠くから写した写真はどれも構図が似ており、展示室に並べても年代や事業による判別が難しいことが容易に予想されたため、実際の展示ではそうした研修会場以外で人々や風景を撮影した写真を使用した。

NWECの出版物は女性教育情報センターで以前から継続的に登録・所蔵しているが、40周年展を機に、出版物以外の資料についても継続的な保存を心がけることにした。それに伴い、女性アーカイブセンターで「国立女性教育会館資料」という資料群を作成し、今後はそこに出版物以外の資料を登録していく予定である。

図1 展示資料例

展示資料名	解説
国立婦人教育会館業務概況（1979？）	会館設置の経緯や施設配置図、組織図などが記載されている
国立婦人教育会館敷地の変遷（1979？）	第二次世界大戦以前・以降の敷地の所有者を記した手書き資料
アルバム「開設に向けての陳情風景」（1972）	会館開設の5年前、首相官邸で田中角栄首相（当時）に、婦人団体懇談会で稲葉修文部大臣（当時）に、それぞれ会館建設の陳情を行った時の写真
パンフレット「国立婦人教育会館総合カラーAVシステム」（1977）	会議や研修で使用するため、研修棟全体に最新のAVシステムが導入されたことの解説資料
国立婦人教育会館絵葉書（1979～1984頃）	NWECの建物や敷地の写真絵葉書。開館当時から数年後にかけて製作されたと推測される
ダンスを踊る三笠宮殿下（1979）	日本レクリエーション協会総裁としてフォークダンスの普及に取組まれた三笠宮殿下が、会館で開かれた国際フォークダンス研究会議で他の参加者とダンスを踊られた時の写真
皇太子ご夫妻「行啓御日程細目」（1982）	昭和57年、皇太子ご夫妻（当時）が視察のため来館された。会館には分刻みの日程表が残されている
皇太子ご夫妻行啓風景（1982）	女性教育情報センター視察中のご夫妻、体育館でダンスを踊られる美智子妃の写真
常陸宮妃殿下御成りに伴う職員の分担表について（1982）	
常陸宮妃視察風景（1982）	
ポスター「論文募集・婦人教育の充実をめざして」（1982）	会館設立5周年記念事業の一環として、研究者や個人を対象に論文を募集した時のポスター
開館5周年記念論文発表会（1982）	論文募集の当選者による発表会のプログラム
ポスター「女性学講座」（1982）	会館設立5周年記念事業の一環として開催した講座のポスター
シンボルマーク募集チラシ（1997）	開館20周年を記念して、会館の愛称を決めると同時にシンボルマークを公募した際に作成
平成14年度ヌエックカレンダー（2002）	
開館30周年記念切手（2007）	開館30周年を記念して、会館の四季と施設を紹介するオリジナル切手を作成した
国立婦人教育会館ニュース・ヌエックNews	会館の広報誌。開館10周年（1988）・20周年（1998）・30周年（2008）の際に発行したもの

## 展示パネル

展示室には展示ケース6台がある他、壁面にB1サイズの展示パネルを十数枚程度掛けるスペースがある。40周年展でもパネルを設置したが、単に40年分の長い年表を掲げて展示として意義あるものにならないと考え、NWECの事業をテーマ別に解説したパネル計11枚をメインパネルとして作成した。

テーマは「男女共同参画推進リーダーの育成」「多様なキャリア形成支援」「家庭教育から次世代育成へ」「国際社会との連携」「国内外の女性の人権を守る」「生涯学習促進とネットワーク形成」の6つとした。NWEC40年の歴史の中には、時代の流れや国の指針などに合わせて中止もしくは発展的解消を遂げた事業も多いが、パネルの中で、そうした過去の事業も現在の事業と繋がって今のNWECがあることを図示するよう心がけた。

## 来室への工夫

NWECには、研修や合宿など様々な目的を持った、幅広い年齢層の個人・団体利用者が来館する。そうした利用者に少しでも展示室への関心を持っていただくため、会期中にいくつかの「てこ入れ」を行った。

### ①展示資料の追加

アーカイブセンター所蔵資料からは、会館設立にあたって全国各地の女性団体から文部大臣等に寄せられた会館用地確保の要望書を追加した。会館設立には全国3,800万人の女性の願いが込められているという趣旨の文言が達筆で記されており、今となってはかなり大仰に思われる記述ではあるが、当時の女性団体が、全国の団体が一堂に会することのできる施設の設立を強く求めている様子が垣間見える資料である。

### ②開館40周年クイズ

展示室に来館者向けのクイズを3問掲示した。1・2問目は展示内容を見ればすぐに回答できる簡単なもの、そして3問目を「女性教育情報センター(図書館)はどこでしょう」とし、来館者が解答用紙に記入して女性教育情

報センターに立ち寄ると、職員が正解数に応じたNWECオリジナルの景品を渡すようにした。

### ③「男女共同参画の木」顔はめパネル再展示

平成28年に実施した平成27年度女性アーカイブセンター所蔵展示「男女雇用機会均等法から30年」において、NWECの敷地内にある「男女共同参画の木」をモチーフにした顔はめパネルを作成・展示したところ、遠くからでも目を引くためか思いがけず好評を得たため、40周年展においても顔はめパネルを使用することにした。入口付近に設置することで、親子連れや学生などの来館者が入室するきっかけを生んだ。

## 3 主催事業

### SALA Open Library Weeks

NWEC内にある男女共同参画社会を目指した女性・家庭・家族に関する専門図書館である女性教育情報センターは埼玉県大学・短期大学図書館協議会（以下、SALA）に加盟している。

SALAでは毎年Open Library Weeks（以下、OLW）を実施している。これはOpen館が各テーマを設け、そのテーマに関心のある加盟館の図書館員が集い、情報交換及び人的交流を行う企画である。他館の取組みを見学したり、自館の取組みを紹介したりすることで、業務を見直すとともにサービスの向上を目指すことを目的としている。

平成29年度のOLW実施期間は平成29年10月10日～11月30日と設定された。事前のSALA加盟館企画募集アンケートでNWECを見学して埼玉県内での女性活躍サポートとして、他の図書館との連携をどのように構築するかを議論したいという要望があり、ちょうどNWEC40周年でもあるので40周年企画としてOpen館として手を挙げることにした。

OLW実施期間内に、北米の総合研究大学であるRutgers University LibrariesでWomen's Studies Librarianとして活躍しているKayo Dendaさ

んが来日することとなっていたので彼女に講演してもらうこととした。

NWEC企画のOLWはNWEC40周年「図書館の連携－男女共同参画に関する情報を中心に」というタイトルで平成29年11月6日に実施された。

当日は埼玉県内の大学図書館職員及びNWEC職員合わせて19人が参加し、女性教育情報センターの見学並びにNWECの活動についての説明の後、Kayo Dendaさんによる講演が行われた。彼女が所属している大学図書館を中心にアメリカにおける図書館の連携事例等の紹介や具体的にどのように女性学の研究支援を行っているか講義していただいた。その後、質疑応答とディスカッションが行われた。アメリカの大学図書館がどのような活動を行い、どのようなコンソーシアムを形成しているのか、現状を聞くことができ、非常に参考になった。また、各館から図書館の価値を学内に伝えるためにどのような活動を行っているのか発表があり、組織内における図書館のアピールについて考える良い機会となった。

SAIA Open Library Weeks 2017 国立女性教育会館企画

 NWEC40周年

# 図書館の連携

～男女共同参画に関する情報を中心に～






**日程** 2017年 11月6日(月)

**時間** 14:00～17:00 (図書館見学30分程度を含む)

**会場** 国立女性教育会館 (NWEC)

**講師** Kayo Denda  
(Head, Margery Somers Foster Center, Rutgers University Libraries)

男女共同参画を推進するために専門図書館と大学図書館等がどのように連携出来るか考えたいと願います。本OLWでは当館の取組みを紹介した後、女性学の研究支援を行うRutgers University LibrariesにてWomen's Studies Librarianとして活躍中のKayo Denda さんにご講演いただきます。Kayo Denda さんは国際的な女性学ライブラリアンのネットワーク構築にも貢献しています。その後参加者と意見交換をしながら今後の可能性などを考えたいと思います。

**申込先** 国立女性教育会館情報課 (担当: 堀川) 申込期限: 10月30日(月)

**住所** 埼玉県比企郡嵐山町寄台728 (東武東上線嵐山駅徒歩12分)

**連絡先** infodiv@nwec.jp TEL:0493-62-6726 FAX:0493-62-6721

※お申し込みはできるだけメールでお願ひいたします。メールの返信は厳密に「OLW事務局」とし、関係者、参加者以外には宛先を明かせません。



## 40周年記念シンポジウム

毎年夏に実施する「男女共同参画推進フォーラム」には、全国各地から1,000名を越える学習者がNWECに集まる。地域の女性課題に取り組む女性団体のリーダーや構成員、行政担当者、小中高等学校の教職員、大学の研究者、ジェンダー課題を学んでいる学生、企業で女性活躍やワーク・ライフ・バランスに取り組む担当者など幅広い学習者が集まり、50近いワークショップをNWECの施設一杯に展開。互いに、実践の中から得られた知見や現場で把握された課題、最新の研究や調査結果を情報交換し、次の一步に繋がる知見やネットワークを共有する場となっている。

今年度は、この「男女共同参画推進フォーラム」を40周年記念事業として、フォーラムの中日（3日間のうちの2日目）に「自分が変わる、社会を変える～明日に向けてのロードマップ～」というタイトルで40周年記念シンポジウムを実施した。このタイトルには、NWEC自身が、これまでの歩みの成果をしっかりと踏まえながら今後の事業展開につなげていくという想いと、男女共同参画課題を学ぶ一人一人に、個人としての自分自身の学びに留まらず、その学びをより豊かな社会づくり（男女共同参画社会の創生）に活かしていただきたいという想いが込められている。

NWECが創設されて40年が経ち、設立当初とは女性のおかれている位置が大きく変わった。雇用機会均等法により働く女性の権利が守られ、家庭科の男女共修により男女の別なくライフキープिंगの基礎能力を身に付けることが推奨されるようになった。1999年には男女共同参画社会基本計画が施行され、男女共同参画社会の実現は「21世紀の我が国の最重要課題」と明確に位置づけられた。女性に対する暴力を防止する「配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護に関する法律（いわゆる「DV法」）」が定められ、組織の指導的位置に占める女性の割合を増やしていくため、301人以上の従業員を抱える企業や組織を対象として女性管理職の割合を向上させる取組みを推進する「女性の職業生活における活躍の推進に関する法律（いわゆる「女性活躍法」）」も成立した。また、2011年に起きた東日本大震災では、避難所の運

営や復興計画の策定時に女性の視点を入れることがいかに重要であるかが指摘され、社会全体で共有されることとなった。

固定的性別役割分業意識は今なお根強く、「ガラスの天井」と言われる女性の昇進を阻む組織幹部の無意識のバイアスや、女性や母性を取り巻く暴力、貧困、人権侵害などは依然として解決されていない。しかし、男女共同参画課題は一步一步克服されており、徐々にではあるが、社会のシステムを構築する位置に立つ女性も現れている。いよいよ、国民の半分を占める女性の視点や意見が社会の基盤をつくる場に反映される時が来ている。

一方、この40年で男性の意識も大きく変わった。高度経済成長時代には、「男は働くもの」とされ、長時間労働や本人の家庭環境に配慮しない全国転勤を受け入れながら、国の、家庭の経済活動を支えてきた。「男子厨房に入るべからず」「特に3歳までの子育ては母親の仕事」といった価値観が広く普及していたこともあり、男性が子育てや地域活動、仕事以外の自己実現にける時間はほとんどなかった。しかし、近年は、料理をする男性の人气が高まったり、「イクメン」「イクボス」が歓迎される風潮も高まっている。

女性が経済活動に参画するためには、それと平行して、男性が家庭責任や地域責任をシェアすることが必要不可欠である。こうした考えのもと、40周年記念パネルディスカッションは、企業でキャリアを積み重ねてきた田中恭代氏（旭化成株式会社人事部付シニアマネージャー／前旭化成アミダス株式会社代表取締役社長）と、男性側からみたジェンダーの視点で社会のあり方を問い直す研究者である多賀太氏（関西大学文学部教授）の2名を迎え、内海房子（国立女性教育会館理事長）をコーディネーターとして、これから私たちが目指すべき社会のあり方を捉えるディスカッションを行うこととした。

まずはコーディネーターの内海理事長が日本における男女共同参画の歩み、国立婦人教育会館（現国立女性教育会館）設立経緯や経過について当時の写真などを映し出しながら説明しつつ、設立からの40年を振り返った。

そして、現在NWECで行われている調査研究、研修事業（「企業を成長に導く女性活躍促進セミナー」や「男女の初期キャリア形成と活躍推進に関する調



査研究」)を紹介した。

シンポジウムでは、田中氏から、働き続けることを選択した女性のこれまでの道のりや今までの経験が語られた。男女の性差を意識せず過ごしていた大学時代とは一変した旭化成入社後に、ぶつかった壁や気づき、出会った言葉が自分の原点になったことなどが伝えられた。例えば後輩から「田中さんにはなれません」と言われた時はショックだったそうだ。頑張っている田中さんを見て後輩は、「あんなに大変なことは自分にはできない」と思っていることを知り、自分だけ頑張っても誰もついてこないことがわかったと語った。さらに田中さんが入社して10年目ごろ、辞めようかと友人に相談した時に、「続けているだけすごいいいこと。継続は力だね」と、自分を丸ごと認めてもらえたうれしさを感じたことや、ずっと事務職だった田中さんが、「王道」と言われた工場の部署を希望した時に、「どこが君の現場なの？ 事務職で働いている女性の気持ちを一番わかるのは君だよ。あなたにしかわからない現場はここじゃないの？」と言われた言葉から、自分が得意な、自分しかわからない場所を見つめ直すことで、自分の立ち位置や持ち場を考えるきっかけになったことなどのエピソードの紹介があった。最後に、EO(イコールオポチュニティ)推進室を立ち上げ、株式会社旭化成アビリティでの障がいのある仲間との出会いを通じて気づいた、「男性も女性も障がい者もその人の個性であり、個々の能力や可能性を信じて助け合う社会を創ること」の大切さを訴えた。

多賀氏は、まず最初に、男性にとっての男女共同参画には2つの意義があると解説。その1つ目として、男性のあり方が女性の活躍を阻んでいるため、男性が変わらなければならないこと、2つ目として、男性自身が固定的性別役割のために疲弊し、生きづらさを抱えていることを挙げた。男性に対する育児参加への期待が高まる一方で、一家を支える扶養責任は男性がもつものという意識が依然として男女の中に残っており、男性も仕事と家庭生活の両立をめぐる悩んでいる現状や、妻の負担を軽くするために育児参画をした場合には競争から「降りた」者として扱われることなどを訴えた。非正規雇用

率の急増で男性が安定した収入を確保することの困難さが婚姻率の低下につながるなど社会情勢の急激な変化の中で、これからは「標準的働き方」を変え、女性が経済的自立を図ることが必要だと説いた。そしてワーク・ライフ・バランス社会の実現に向けて、「仕事だけに没頭し、家庭責任が免除される働き方が標準」とされない社会、お客様中心体制の見直し、家庭責任を負う者が能力を発揮できる雇用環境、自分や同僚、部下のワーク・ライフ・バランスに敏感であること等、社会・国政、職場組織、地域、個人レベル、そして教育における取組みについて提言した。

最後に、内海理事長は、家庭責任を負う労働者が能力を発揮できる労働環境づくりが必要であり、家庭も仕事も情熱をもって一生懸命取り組む方々が増えることを願っていますと結び、一人一人の力を発揮でき、男女ともに暮らしやすい社会づくりのための議論を展開するシンポジウムとなった。

平成 29 年度男女共同参画推進フォーラム  
40 周年記念シンポジウム



## 4 40周年記念ロゴマーク

開館40周年をわかりやすくアピールするために40周年記念のロゴマークを作成することとなった。ロゴマークの作成にあたっては職員に公募することとした。公募の結果15点の作品が集まり、以下のロゴマークが40周年記念ロゴマークに決定した。



このロゴマークはNWECの豊かな自然と男女共同参画推進機関としての協調性や調和をデザインしている。また40周年にふさわしいゴールドでanniversaryを描くことで、NWECと男女共同参画社会の光り輝く未来を表現している。

このロゴマークのシール及びマグネットを作成し配布した。

## 5 40周年記念誌発行

40周年の記念誌として写真を中心としたダイジェスト版と資料編を発行した。

記念誌は開館10周年、20周年、30周年にもそれぞれ発行されているため、

ダイジェスト版・資料編共に平成19～29年度について主に記載している。

ダイジェスト版の掲載内容は、開館から40年間の沿革、平成19～29年度の主な歩み、会館及び女性教育情報センターの年度別利用状況、施設配置図などとなっている。1,000部作成し全国の男女共同参画センター、教育委員会、男女共同参画行政担当課、女性学関連研究所、女性教育団体等に配布した。

資料編の掲載内容は、平成19～29年度の主な出来事、中期目標・中期計画・年度計画及び事業の変遷となっている。100部作成し主に館内記録用ではあるが、NWECの女性教育情報センターに配架され閲覧できる他、国立国会図書館にも納本され閲覧可能となっている。

## 6 40周年記念メッセージ募集

40周年を記念するにあたり、NWECからの一方的な発信だけでなく多くの人に参加してもらいたいということで、日頃からNWECの事業運営に理解・協力をいただいている方々からNWECに関するエピソードやメッセージを募集した。NWECを利用した際のエピソードや感想、これからのNWECに期待することなどを1件につき400～800字程度にまとめて寄せていただいた。

募集期間は平成29年6月1日～9月11日とした。NWECのHPで広報すると共にNWECにゆかりのある方には個別に広報を行った。また、NWEC主催の男女共同参画推進フォーラムの際にはメッセージ募集のチラシを参加者に配布し、直接記載していただいた。応募者全員にバッグ、クリアファイル、付箋、40周年記念ロゴマークのマグネットといったNWECグッズを贈呈することとした。その結果、125人からメッセージが寄せられた。

寄せられたメッセージの一部についてはNWECのHPに掲載する予定である。

## 7 40周年のぼり旗

NWEC近隣住民やNWEC前の幹線道路通行車へNWEC40周年をアピールするためののぼりを作成した。

担当職員がのぼりのデザイン案を作成し、他の職員から出た修正意見や新たなデザイン案を加え、黄色地に「『開館40周年展』開催中」と記したもの、青地に「『開館40周年展』開催中」と記したもの、赤地に「男女共同参画社会を目指して」と記したものの3

種類を作成した。どののぼりも上に40周年記念ロゴマークをあしらい、国立女性教育会館と入れた。

40周年のぼり旗



## 8 記念植樹式

40周年記念植樹式を、開館40年目となる平成29年11月13日に執り行った。式には、職員、ボランティア、株式会社ヌエックベストサポートの社員、総勢58名が出席した。

内海理事長、ボランティア代表の宮本氏、株式会社ヌエックベストサポートの長崎社長の挨拶のあと、正面玄関前に植えられたクヌギの苗木に土をかけ植樹式は終了した。クヌギは、成長が早いことで知られており、女性活躍・男女共同参画がより一層進むことを祈念し、この樹が選ばれた。

植樹式の終了後、出席者全員で記念撮影を行った。

植樹式



集合写真



(ほそかわ・めぐむ 国立女性教育会館情報課長)

(やまざき・ひろこ 国立女性教育会館情報課情報係長 (併) 専門職員)